

中央公論

養老孟司
× 甲野善紀

自然と人間を壊した「ラク」の追求

「超」増税時代を 生きる

特集

大相撲スキャンダル続発の理由 橋本 治

日本に二大政党制は無理

〈また昭和の繰り返し〉 半藤一利 × 保阪正康 × 松本健一

ノーベル賞受賞者・益川敏英インタビュー

密着ルポ・W杯日本代表奮戦記
宇都宮徹也



この夏、旬のテーマを 読む50冊

「龍馬と幕末、沖縄問題、電子出版元年、
ベーシックインカム……」



2010
AUGUST
launched
in 1887

8

日中友好南京柔道館の設立を通りよ

南京は必ずしも
反日ではなかつた

山下泰裕

東海大学体育学部長・NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長

誤解される南京

今年二月一日、中国・南京市にわが国が資金援助をして建設した柔道場、「日中友好南京柔道館」がオープンした。外務省のODA（政府開発援助）「草の根文化無償資金協力」を活用したもので、1907年にできた青島に続く、今回で二つ目の「友好柔道館」である。このプロジェクトに最初から関わってきた私も、オーブンニングセ

モニーに駆けつけ、こけら落としに地元の体育学校の生徒たちを指導した。当日は、日本のマスコミも大学して訪れてくれた。取材に対して私は、「日本人にとつても心に刺さった場所だけに、柔道場の建設には「一番ふさわしい」と話した。

「あの」南京に、日中友好を謳った柔道場ができた。そのことの意味を、南京の真の姿を多くの日本人に知ってもらうならば、こんなには嬉しいことはない。

それが、偽らざる心境だった。

だが、翌日の新聞を目にして、私は落胆した。それは目にした全紙に判で押したように、「反日感情の強い南京で」と記されていたからだ。記事の印象を率直に言えば、「あんなに大変な場所で、山下はよく頑張った」というものだった。誉めてもらうのはありがたいが、これは事実には反する。

南京は旧日本軍の「大虐殺」をめぐり、われわれの心にさまざまな影を落としている。中国の中でも、とりわけ反日感情が強い地域というのが、大半の日本人の「常識」なのはたしかだろう。だが、断言するが、南京は決して「反日的」な都市ではない。友好柔道館の完成を機に、メディアには誤解を正すキャンペーンをこそ期待したいのだが、それは見事に裏切られた。

私が中国に柔道場をつくり、柔道を広めようとするのは、そのことを通じて日本を知り、理解を深めてほしいと願うからにはほかならない。同時に、真

の友好を築こうとしたら、相手のことを深く知る必要がある。「ここで、あらためて、南京に対する誤解と偏見を解きたい。」

「男子柔道を助けてください」

まずは、これまでの経緯を振り返ってみよう。中国に、日本の支援による柔道場をつくらう……。そんな取り組みの端緒となったのは、〇四年六月に



日中友好南京柔道館で学生を指導（写真提供：毎日）

上海で開かれた、国際柔道連盟理事会とセミナール会場での出来事だった。中国柔道協会副主席だった宋兆年さんが近づいてきて、「山下さん、四年後は北京オリンピックです。女子については心配しておりませんが、男子のことを考えると夜も寝られません。どうか力を貸してください」と、両手で私の手を握るのだ。たしかに、中国男子柔道はメダルとは無縁だった。

とはいえ、正直、面食らった。なぜなら、その時まで中国の柔道に対して特別な思いを抱くことはなかったし、まさか助けを請われるなど思いも寄らなかつたからだ。だが、真剣な姿を見るうち、「一興味がすにいられないな」という気持ちになっていった。

後日、共善を出すためにたびたびお会いしていた、当時のトヨタ会長・奥田頼さんにその話をすると、「それはいい」と、協力を快諾してくれた。奥田さんから声をかけていただいた新日鉄、全日空を合わせた三社の資金援助

を得て、北京オリンピックに向けた中国男子柔道支援が始まった。

それから半年くらいたったころ、外務省から思いがけない提案があった。「北京を目標とする取り組みは素晴らしいですが、さらに長期的な視点に立った中国の柔道支援をやりませんか」という。〇五年当時、中国全土で反日デモの嵐が吹き荒れており、悪化した日中関係の改善のためには何でもやろうという意図が伝わってきた。

むしろ、異論があろうはずがない。外務省と、柔道の国際的な普及などを目的に私が中心となって立ち上げたNPO法人「柔道教育ソリダリティー」などが協力して検討を進め、具体的な形にしたのが、冒頭で紹介した青島の日中友好柔道館である。

〇六年十一月に現地との意見交換のため青島を訪れた際、中国人柔道家から聞かされた話が忘れられない。日清戦争に敗れた中国は、「二十世紀初頭、国の「再建」に向け、若者を積極的に

海外に送り出した。日本にも多くの中国人留学生が来たのだが、弘文学院という、中国からの留学生受け入れのための専門学校をつくって彼らを受け入れたのが、柔道の創始者・嘉納治五郎だった。一三年間で七〇〇〇名に及ぶ留学生が嘉納の元に身を寄せたが、その中には魯迅や毛沢東の義父・楊昌濟などもいた。楊に影響を受け続けた毛沢東は、後に自著で嘉納治五郎と日本柔道の精神を賞賛している――。

恥ずかしながら、初めて聞く話だった。創始者の手によって、柔道の心が中国に「伝来」していたことに、強い驚きと感銘を受けた。と同時に、そんな逸話を熱く語ってくれる人間が中国にはいるのだと、われわれがやろうとしていくことに確信も持てた。

ところが、青島でその話を聞いたころには、すでに「次はぜひ南京に」という要請が私の元に届いていた。しかし、今から考えれば、私はすいぶん冷たい対応をした。「青島の柔道館が完

成して、本当に日中友好に役立つことがわかった時、初めて二つ目はどこにしようかという話ができると思いません」と、明言を避けていたのである。「草の根」ODAは、上限一〇〇〇万円までと決められている。高いか安いかは見方の分かれるところだろうが、いずれにせよ日本国民の税金である。そう簡単に、次も、というわけにはいかない。中国中に友好柔道館が林立するのだから、あるいは立ち消えになるのか、ひとえに青島の成否によると、私は本気で考えていた。

結果的には、青島の人々は、そんな思いを裏によく受け止めてくれたと思う。道場には嘉納治五郎の大きな写真とともに、「嘉納とは」「柔道とは」の文章が掲げられている。私には、建物それ自体が柔道精神を具現化した、日中友好のシンボルに映った。われわれのNPOの招待に応じて、青島の子どもたちが来日して、日本人と合同練習するといった交流も本格化した。

「これなら、南京を考えてもいいだろうか」と下準備を始めていた〇八年八月十五日、終戦記念日に合わせて「南京に日中の柔道場、山下さんも動く」という「スクープ」が、ある新聞に載った。嬉しい半面、「夢ったなあ」というのが本音。また外務省にも相談していなかったのである。恐る恐る電話をかけた私に、担当者の答えは「いい話じゃないですか。早速やりましょう」というものだった。

「南京でこそ」に拍手

マスコミに対する不満を口にしたが、私自身も初めから南京事情に通じていたわけでは、もちろんない。初視察は、〇八年十一月、周園からさんさん「脅かされて」の旅立ちだった。

たとえば、あえて名前を出すことをお許し願えば、国際派で知られる東海大学の松前総長には、「あそこは大変なところだから、気をつけなさい」と「アドバイス」された。また、南京に「いい」と真顔で話してくれた。

われわれは、中国の抗日記念館の代表格とされる、「南京大虐殺記念館」にも足を運んだ。入り口に「同じような過ちが繰り返されないよう」という建設の趣旨が掲げられた館内には、当然、日本軍による「残虐行為」があふれていた。ところが、出口近くまで来て驚いた。なんと、最後に「日中友好の歴史」の展示があるのである。何もかもが、聞くとも見るとでは大違いだった。

未来を見る南京

過去に「こだわる」日本

初視察から一年半、南京の柔道館は無事オープンを迎えた。最初に述べた今年三月のオープニングセレモニーに、話を戻させていただきたい。

実は、その場で初めて知った事実があった。建設のために日本が供与したのは、九万六四〇三ドル（約八九〇万円）。ところが、南京市当局も、ほぼ同額の四八万円余りを支出していたの

入る前、香港に立ち寄り、当地で五〇年以上柔道の普及に努めている大先輩が主催するパーティーに出席した折には、彼の「山下先生は明日から南京に入られる。ご無事をお祈りして……。」というスピーチを聞いた。中国に半世紀も住む人の言葉である。「無知」だった私も、それなりの緊張感を持って現地に向かったものだ。

そして、実際にこの日に見た南京。そこには、聞かされていたのとはまったく別の世界が広がっていた。現地の人たちは、温かく私たちを迎え、友好柔道館への熱い期待を口にした。

候補地の視察を前に、私は南京大学で、「柔道の心、日本の心」をテーマに講演を行った。三〇〇人編の聴衆の内訳は、南京の柔道関係者と南京大学に留学中の日本人学生が半分、残りが日本語や日本文化を学ぶ、南京大生を中心とする中国人という構成だった。

講演終了後の質疑応答で、会場から「なぜ南京に柔道場をつくらうと思っ

たのか？」という質問が出た。よくぞ聞いてくれたという気持ちで、私は次のように述べた。「柔道を通じた日中交流拡大を考えた時、今柔道館をつくるとしたら、この南京以上にふさわしい所を見つけることはできない」。過去の「不幸な歴史」を踏まえた発言だったのは、言うまでもない。話し終えると、会場にいた中国人からも日本人からも、拍手がわいた。

初視察から一年半、南京の柔道館は無事オープンを迎えた。最初に述べた今年三月のオープニングセレモニーに、話を戻させていただきたい。

実は、その場で初めて知った事実があった。建設のために日本が供与したのは、九万六四〇三ドル（約八九〇万円）。ところが、南京市当局も、ほぼ同額の四八万円余りを支出していたの

である。同席していた日本領事館の人に、「外国にODA支援を行った時、同じ案件に現地も資金を出すことは、よくあるのですか？」と聞くと、「いえ、聞いたことがありません」と、彼も驚きの表情を隠さなかった。南京がいかにこの柔道館に期待し、日本との交流を深めたいと願っているのかを、象徴的に示す「事件」と言えるだろう。

さて、子どもたちとの「初練習」を終え、私は日本のマスコミの記者会見に臨んだ。大半は、上海にある支社から「出張」してきた記者さんたちである。会見は、ちょっと想定外の質問から始まった。「山下さん、この柔道館には日中の国旗が並んでいますか、どう思われますか？」と聞くのである。

後で知ったのだが、彼らは南京で日本の国旗が仲良くはたためる姿など、それまで目にすることがなかったそう。眼前の風景を理解できず、思わず口をひらいて出た質問だったのかもしれない。私の答えは、「日中友好親善のために

つくられたものだから、当然でしょう」という、シンブルなものだった。日本からの同行者によれば、その言葉を聞いて、記者たちの半信半疑の眼差しが納得の表情に変化したそう。記事を読んでも、私たちの思いは理解してもらえたとと思う。それだけに、もう一歩踏み込んで、「南京の人たちの思い」も、正確に伝えてほしかったと、残念でならない。

「南京が反日的な場所ではない」という感想は、私が「特別な立場」で現地と接しているからだろうと思われる人がいるかもしれない。「たった一年半で、真実がわかるのか？」という疑問を抱かれても、不思議ではない。しかし〇五年、反日行動が中国全土に広がりを見せる中、主要都市で唯一、テモが起らなかったのが南京なのだ。こういう事実を知る日本人もまた、少ないのではないだろうか。

私見ながら、南京の人々が日本人の思うほど反日感情にまみれていないの

は、彼らの寛大さや優しきだけが理由ではないと思う。現地に行き、さまざまな人と行動を共にし、話をする中で感じるのは、とにかく日本と交流を深めたいという熱い思い。柔道や芸術文化もさることながら、彼らが特に渴望するのは経済交流であろう。

日本企業の南京への進出は、前に述べたような「誤解」を背景に、溜り気味だ。現地の人々からすれば、順調に経済発展を遂げる他の都市との「落差」を、いやでも痛感せざるをえない。「二の足を踏まず、日本企業にもっと来てほしい」というのが、本音なのだと思う。未来を見つめる南京、過去にこだわる日本……。こと南京に限っては、この図式が成り立つように、私には思えるのだ。

ブーチンを持たせ、待たされ

繰り返しになるが、私がNPOまでつくって世界に柔道を普及させたいと考えるのは、嘉納治五郎が毛沢東をも

心酔させたような、柔道の精神、和の心を広めたいがゆえだ。それを通じて、日本という国に対する興味関心を持ってもらい、理解を深めてもらいたいと願うからにはほかならない。

ひよんなことから関わった中国だが、友好柔道館の設立はわれわれの予想を超えて注目され、交流の拡大に著実な成果を上げつつある。

〇八年の南京視察の前、開設一周年を迎えた青島の道場で、私は中国国営テレビの取材を受けた。小崔さんという、日本で言えば、みのもんたさんのような人気インタビュアーが相手である。テレビカメラは、なんと七台「職員」されていた。お互い柔道者姿で向かい合い、四五分間語り合ったのだが、柔道経験のない小崔さんが、嘉納治五郎や私のことを非常に細かく調べあげていたのが印象的だった。

NPOを通じて指導者の派遣や、中国人指導者の養成、あるいは柔道を始めた中国の子どもたちと日本の子ども

たちの交流……。青島柔道館を基盤にしたさまざまな取り組みの結果、現地では、学校の体育の授業に取り入れられるところまで、柔道が浸透した。そこで得た教訓、香積は、南京でも生かせるはずである。もちろん、こうした柔道を通じた交流促進を、中国以外でも活発に展開していくつもりだ。

最近方を入れているのが、韓国ロシア。あの国には、柔道の上き理解者である、ブーチン首相というこの上ないサポーターがいる。実はこの三月、南京の後ロシアを訪問した。サンクトペテルブルク大学での講演が主な目的である。ところが、訪ロ二日前に、「首相が会いたいと言っている。一日早く来られないか？」と打診された。ブーチン首相の誘いではあるが、無理な相談である。丁寧に断りすると、再度話があり、結局、講演後にモスクワでお会いすることになった。

アポイントは午後九時、五時終了予定の講演を二〇分早く切り上げ、空港

からバトカー先導のVIP待遇で車を飛ばして、ホワイトハウス（ロシア連邦政府庁舎）に到着したのは、八時五十分だった。ところが、今度は待てど暮らせど、首相の執務が終わらない。実際に会えたのは、十一時五十分のことだった。お互い無理に無理を重ねた再会ではあったが、こうしたニュースは著早く、大々的にロシア全土で報じられる。広告効果は絶大なのである。

今年七月には、教える子の井上康生と共にイスラエル、パレスチナを訪問する計画を立てている。現地の指導者や選手に和の心を説き、両者の子もたちを集めた練習もやろうと思っている。柔道精神の根幹をなすのは、「相手を尊重する心」。柔道による交流を通じて、若い心に少しでも照らした灯がともれば、と願うのである。

横濱市山崎区

やましたやすひら 一九五七年熊本県生まれ。八四年、ロス五輪柔道無差別級で金メダルを獲得。全日本選手権九連覇。